

外伝

《鉄道兼用だった二子（ふたご）橋、大山詣りは復興支援?!》

多摩川中流の二子（ふたご）橋は、多摩川本川の近代道路橋としては、六郷橋に次いで2番目に古いものです。関東大震災時、東京への救援物資や復旧資材の運搬に難儀したことから、1925年（大正14）に建設されました。鉄道併用の道路橋で、玉電が溝口まで延伸し1927年（昭和2）に開業しました。「二子」は、川崎市側の地名です。

二子橋は、大山街道（現国道246号、東海道の脇街道注1）が多摩川を渡河する地点（渡し）に架けられたものです。大山街道は、「大山詣り」といって、江戸から丹沢山系の大山（注2）へ参詣するルートでした。その距離、約70kmです。

「大山詣り」は、歌舞伎や落語（注3）で演じられるほど有名で、宝暦年間は、年間20万人が参詣したそうです。大山阿夫利神社に身を清めて参詣した後、帰途に精進落としの宴会を行ないます。（注4）

これは、現在風にいえば、参詣と行楽を兼ねた1週間ほどの大山周辺ツアー（講）でした。旅行代理店（講の企画社）、ホテル（旅籠、宿坊）、神社（大山阿夫利神社）が連携し、旅先案内人（先導師）と一緒に旅行するものです。

大山周辺は、1707年（宝永4）の富士山大噴火で、降灰による壊滅的被害を受けます。その復旧・復興に40年以上かかったといわれ、そして半世紀後の宝暦年間（1751年から1764年）に大山詣りが流行するのですね。「大山詣り」は被災地の復興・地域再生に大きな貢献をしたことでしょう。

注1：矢倉沢往還とも言われ、赤坂御門から、青山、渋谷、三軒茶屋より瀬田を経て、多摩川を二子で渡り、多摩丘陵、相模野の中央部を横切り、足柄峠手前の矢倉沢関所に至る街道。

注2：大山は、雨降山（あふりやま）とも言われ、山頂に大山阿夫利（あふり）神社があります。主祭神は、本社がオオヤマツミ（コノヤサクヤ姫の父で山の神様）、奥社にオオイカツチ（雷の神様）、前社にタカオカミ（雨・水の神様）です。

注3：「大山詣り」のあらすじは、「長屋の亭主たちが、旅案内人に連れられ大山参りをします。参詣までは無事でしたが、帰途の道中、酒癖の悪い男が宿屋の風呂場で仲間に暴力を働きます。これに腹を立てた仲間たちは、酔いつぶれ寝込んでいる男を丸坊主にし、翌朝さっ

さと帰途に着きます。寝坊した男は、取り残されるも、一計を案じ、仲間より先に江戸に帰宅します。そして仲間のカミサンに、他の仲間は船で遭難して亡くなったと伝えます。これを聞いたカミサン連中は、神を剃って喪に服します。男は、丸坊主にされた腹いせに、仲間のカミサンを丸坊主にすることに成功したのです。帰宅した仲間たちが怒り心頭。そこで旅案内人がなだめて「お毛が（怪我）なくて、おめでたい」で終わります」。

注4：隅田川で水浴して穢れを落とし（両国橋のところに水垢離（ごり）場があった）、行衣に鉢巻を締め、大きな木太刀を担ぎ、先導師が吹く法螺貝に合わせて「お山は晴天、六根清浄」などと念仏を唱えながら出発しました。

大山街道の途中で一泊、麓で一泊した後、早朝参拝して帰路に着きます。その帰路は行楽を兼ね、小田原、箱根、江ノ島などを経由し、精進落としと称して宴会が催されました。

写真は、①国輝「大山参詣日本橋之図」（1886年（慶応2）、いせはら文化財サイトHP掲載資料より）、②大山街道（東京側）、③大山街道（神奈川側）（②③は、国土交通省川崎国道事務所HP掲載資料）、④二子橋（神奈川県HP写真より）

①



②



③



④

